

『教育の基礎と展開』 第1章 人間形成と教育

2016.9.8 小原孝久

【1】社会的事実としての教育

1. 社会、文化と人間形成 [教育とは「社会化」=文化の伝達]

①E・デュルケム：

- ・教育とは方法的、組織的な社会化である。
- ・個人の外側に存在し、個人を束縛することによって社会的価値を内面化させる作業。
=社会的事実=教育
- ・人類に普遍な教育の理想などありえない

②社会で蓄積された文化は個人に遺伝的に伝わらない→若い世代には学習、内面化が必要

※デュルケムの教育論を、どう考えるか(特に社会化について)

※「教育」とは何か(デュルケムの主張=社会化、に関連して)

2. 文化とパーソナリティー形成 [パーソナリティーの形成に及ぼす文化の重要性]

①M・ミード：男女に固有な気質 (=パーソナリティーの形成) は、生得的なものか後天的なものか、フィールド調査によって明らかにする。(→後天的な要素が大きい)

②3つの事例 (フィールド調査) : アラペッシュ族、ムンドゥグモア族、チャンブリ族

③男女の差異についての文化的見方は重要である。(女子マラソン、女子レスリングなど)

※男女の差異は生得的か、後天的か(→後天的な要素が大きい)

※ミードの見方(男女の差異は後天的な要素が大きい→個人のパーソナリティーの形成に及ぼす文化的要因の重要性)を、どう考えるか

※パーソナリティーの形成は、どれくらい文化の影響を受けるのか。

3. 野生児の事例 [野生児の記録 (言語習得の困難と四足歩行) → 学習の適時性]

①野生児についての報告 (アヴェロンの野生児、カスパー=ハウザー、アマラとカマラ)

②野生児の記録には、言語習得の困難と四足歩行という特徴が共通している。→ 人間の基本的な学習には適時性 (学習が進みうる時期) があることを示している。

※野生児の事例を、(教育という観点から)どう考えるか

※学習の適時性をどう考えるか

【2】遺伝と環境

1. 輻輳説 [遺伝的条件か環境か→輻輳説、学力の遺伝的要因は弱い?]

①人間の性格、知能、学力などを規定するのは、遺伝的条件か環境か。→ 今日では輻輳説(交互作用による)が一般的。(W・シュテルン)

②遺伝的な要因 … 身体や顔 > 知能や気質 > 学力

※遺伝の影響と環境の影響の大きさを、どう考えるか

※学力の遺伝的要因(比較的弱い)を、どう考えるか

2. 予言の自己成就 [「予言の自己成就」という概念、何故この概念を引用したか?]

- ①科学的に検証されない言説（例えば「血液型性格診断」）が無視できないのは何故か。
→ 心理学、教育学などの水準がまだ十分ではない。
→ 「予言の自己成就」（根拠がない予言でも、その言説は周囲や本人にも影響を与える）という考え方もある。

※科学的に十分検証されない「言説」や「うわさ」を、どう考えるか

※「予言の自己成就」を、どう考えるか[→「輿輿説」を補完するもの…?]

【3】意図的教育と無意図的教育

1. 経験の再構成 [デューイの教育論=経験の再構築]

- ①J・デューイ：主体と環境の相互作用である経験を重視し、この経験をのぞましい方向へ改造していくのが教育の機能である。=経験の再構成

※デューイの教育論（経験の再構築）をどう考えるか

2. 広義の教育と狭義の教育 [広義の教育と狭義の教育]

- ①身の回りの人々やさまざまなメディア=広義の教育 (←無意図的教育)

「よりよい」方向へと導こうとするもの=狭義の教育 (←意図的教育)

- ②狭義の教育にも、育児やしつけ（フォーマリティーが高い←無意図的教育）と学校教育（フォーマリティーが高い←意図的教育）の違いがある。

※広義の教育と狭義の教育の違い

※育児やしつけと学校教育の違い

【4】機能的教育の日本の特徴

1. 日本型育児の特徴 [欧米の育児と日本の育児の比較]

- ①欧米の育児：親は揺らぎのない態度で、罰はすぐ与えるべき、脅しをかけたら実行を
②日本の育児：性善説的子供観、添い寝を否定しない、間接的コントロール（自発的同調）

※欧米の育児と日本の育児の特徴と違い

2. 消費社会化 [何を言いたいのか、わからない？]

- ①子供がよい方向へ向かわないのであれば、それは大人の側・社会の側に問題がある。

②子供の文化も変容を遂げ、消費者として、大人以上に消費社会に適応する。

- ③「小さな大人」（消費社会に適応した子どもたち）の再登場 → 「機能的な教育」（？）
は学校教育にも大きな影響を与える。

※消費社会の教育への影響